

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(序章)上方・大阪都市文化の研究拠点形成：大学アーカイブの整備と発信：研究成果報告論集
Author	西田 正宏
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 34 巻, p.1-4.
Published	2022-03-15
ISBN	978-4-904010-49-5
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	上方・大阪都市文化の研究拠点形成：大学アーカイブの整備と発信
DOI	10.24544/ocu.20220516-015

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

序章

上方・大阪都市文化の研究拠点形成：

大学アーカイブの整備と発信

研究成果報告論集

研究代表者 西田 正宏

1 本研究の目的と意義

本研究は、2022 年度に統合する大阪市立大学と大阪府立大学がそれぞれ所蔵する、また今年度収蔵予定の、上方・大阪文化にかかわる貴重なコレクションについて、大学統合に先駆けて整備に着手し、研究利用・地域開放のための整備公開や、デジタル整備を進めながら、共同利用、共同研究を同時に進めていくことを目的とした共同研究である。

大学統合の3年後に、文学研究科は、大阪城という文化的・歴史的表象に臨む森之宮に開かれる新キャンパスに移る。大阪城は上方文化においては、人気の高い〈太閤記もの〉の舞台でありシンボルでもある。つまり、文楽・歌舞伎・落語・講談等の演劇・大衆演芸に代表される上方文化の研究と、そのための大規模な環境整備は、キャンパス移転が持つ都市文化的意義を最大限に増幅できる一大事業と言える。

市大・府大には、それぞれに長年にわたり蓄積してきた上方・大阪文化に関する研究実績があり、貴重な資料もそれぞれ多く所蔵している。さらに2021年度、市大文学研究科では、数万点におよぶ講談・演芸関係資料コレクション（吉沢コレクション）の寄贈を受ける話があったため、本研究チームで2021年春から受け入れ準備を進め、2021年8月には市大および一部資料は府大への移送が完了した。

市大・府大と統合後の大学は、上方・大阪の都市文化形成の一大研究拠点と

なりうるポテンシャルを持つ。その力を最大限生かしながら、紙資料とデジタル双方の環境整備と研究を進めることは、学界全体にも大きな意義を持つ。

2 研究チームについて

上記の目的にむけ効果的に整備と研究を進めるため、以下のようにチームを編成した。

西田正宏 大阪府立大学【代表】

高橋圭一 大阪大谷大学

橋本唯子 和歌山大学

山村桃子 島根県立大学

武田悠希 立命館大学（非常勤講師）

Stephen FILLER（スティーブン・フィラー）オークランド大学（アメリカ・ミシガン州）

水内俊雄 大阪市立大学

桐山孝信 大阪市立大学

久堀裕朗 大阪市立大学

奥野久美子 大阪市立大学

上記のメンバーで、チームを以下の通り研究内容別に大きく三つに分け、資料の整備と研究を進めた。

①都市文化としての上方演芸（講談）の研究

②法哲学者恒藤恭の思想形成と、都市環境がそれに及ぼした影響の解明

③上方・大阪文化資料アーカイブの整備とデジタル化

3 本論集の構成：これまでの成果と今後の見通しにふれつつ

上記□の上方演芸については、2022年2月20日（日）に、大阪在住の講談師、旭堂南海師を招き、本研究を紹介する zoom での報告会を開催し、研究成果報告と吉沢コレクション受贈報告を兼ねた。この報告会では、最初に代表者

の西田正宏が市大・府大の貴重資料と、両大学統合後の資料活用の展望について概説し、続いて共同研究者の奥野久美子が講談本を中心とした吉沢コレクションの受入れ状況や、講談本の近代文学研究への活用について説明、続いて共同研究者の高橋圭一が、吉沢コレクションと寄贈者の吉沢英明氏の功績について語った。その後、旭堂南海師に、講談本を用いた講談創作の実情など、講談師ならではの話をうかがう座談会を設けたあと、講談を実演していただいた。

学内や関係者に限った小規模なものとして予定したが、当日は参加者 60 名を超える盛況で、本研究、ことに吉沢コレクションへの学界の関心の高さがうかがわれた。また、南海師をはじめとする現役の講談師が、講談の創作に活用するために吉沢コレクションの整備公開を待ち望んでいることもわかり、コレクションが今後、学界のみならず演芸界でも活用されることが期待された。

本論集は、この報告会の内容を中心とし、第一章から第四章までは、当日のプログラムのまま構成した。ただし、第二章の吉沢コレクション受入れ報告については、報告会では奥野久美子による 30 分足らずの簡潔な報告であったが、本論集に収載するにあたり、コレクション受入れメンバーとの共同執筆とし、より詳しく大幅に加筆した。2 月 20 日の報告会のプログラムや当日の様子についても、この第二章で佐藤敦子が詳しく報告している。また、報告会では最後のメインイベントであった、旭堂南海師による口演は、本論集では割愛している。

上記□の恒藤恭関連資料に関しては、恒藤恭の少年時代の短歌活動について、関連する貴重な資料が、故郷である島根県の島根県立大学に多数所蔵されている。そのため同大の山村桃子を共同研究者に招き、奥野久美子（市大）とともに双方の資料のデジタル化とデータ化を進めた。2022 年 2 月現在、県大の貴重資料「銀鈴」（恒藤恭も少年時代に講読・投稿した地元の文芸同人誌。明治 30 年代発行）全号が同大松江キャンパス図書館 HP にて公開中である。

研究成果として、奥野はこれら資料と市大恒藤記念室の資料をもとに、2021 年 12 月 1 日、大阪府立大学で「大阪市立大学恒藤恭旧蔵資料の紹介—芥川龍之介との交友、島根県明星派歌人とのかかわりなど—」と題して講演を行った。本論集にはその内容に加筆したものを、第五章に収載している。

上記□の上方資料のデジタル化に関しては、2022年3月中にも、演芸関係資料を中心に、文学研究科特設HPにて、一部画像を公開予定である。

大量の資料の整備は端緒にすぎたばかりである。整備を完了し、学界や演芸界にも寄与できるようになるまでには、今後も長期的に基礎整備を継続しつつ、一定の研究成果を出し、講談師をはじめとする演者とも協力しつつ、学界のみならず地域へも大阪公立大学所蔵資料の魅力と価値を発信していく必要がある。